



The Relationship between the Ancient Japan and Chosen  
from the Viewpoint of the Literately Analysis

仁藤敦史

はじめに

①盟・質・賂

②婚姻

③進調

おわりに



中国の古典である『春秋左氏伝』などの記載によれば、政治的約束を守る人的保証としての「質」は宗教的呪術的拘束力を持つ「盟」および財貨の供与たる「賂」と密接な関係を持ち、三者は一体として春秋時代の国際政治の場面で機能していた。新羅や百濟からの倭国への「質」も、対等な外交関係の手段であり、外交戦略の選択肢の一つであった。とりわけ、百済は倭国に対して軍事的な協力を要請するために、「和通」「結好」という従属的でない外交関係を樹立する外交的手段として主体的に「出質」した。特に百済の質は請兵使という外交使節としての性格が強い。「質」と同時にもたらされた五經博士・僧侶などの定期的な渡来は「賂」としての性格を考慮する必要がある。

豪族層においては、五世紀後半において外交・軍事などを契機として派遣された豪族らと現地女性との間に生まれた「韓子」「韓腹」と称される混血が多数存在した。一方で、倭国は外国女性を迎えることはあっても、倭国女性を出すことは一貫して忌避している。これはキサキの献上（氏女）が初期において采女と質的区別がなく、王妻の地位そのものが王族内の近親婚が一般化する六世紀以降と比較して高くなかったことと関係する。

「任那の調」は、新羅の思惑とは異なり、群臣層の物質的要求を充足させ、かつ大王への求心力を維持するため、朝廷内部における「共同幻想」として殊更に演出された。『日本書紀』によれば、外交・軍事を担当した有力豪族がしばしば新羅や百済からの「賂」をもらったことが批判的に書かれている。しかし、これは律令制下における天皇の独占的な外交権の掌握を前提とした評価である。「賂」に象徴される「朝貢」の対象は大王だけでなく大臣・大夫を含み、王権構成者に対する多元的な外交交渉により成立していた。